指導計画案

展開	導入	展開	
指導上の重点目標	1 題名の「文学史」を意識しながら通読させる。	1 「過去」や「歴史」に関する筆者の考え方とその推移について整理させる。	2 筆者が実体験を通じて抱いた「過去」や「歴史」に関する考え方を、生徒自身の体験と照らし合わせながら、類似の体験がないか考えさせる。
学習活動	① 題名と内容のつながりを確認しながら読み通す。知技・思判表 ② 話の展開をつかみ、意味段落ごとに本文の読解をする。思判表	① 〈第一段〉(初め～三〇一・2) 「わたし」のビートルズ体験について整理し、「生まれて初めて『歴史』に触れた」と「わたし」が感じた原因について理解する。思判表	① 〈第二段〉(三〇一・3～三〇四・1) 「学校で受けた歴史教育」を通じて形成された「わたし」の「歴史」観について整理し、理解する。思判表 ① 〈第三段〉(三〇四・2～三〇五・9) 「わたし」が従来の「文学史」に感じた違和感について整理し、理解する。思判表
指導上の留意点	① 生徒に本文を黙読させながら、題名の「文学史」に関する筆者の考え方の独自性について、一般的な「文学史」のとらえ方とどのように異なるかをイメージさせる。同時に、なぜ「大人にはわからない」のかを考えさせる。 「構成」を参考にして整理する。第三段落で『過去』の小説」を「よく知っている友達のような気がした」と筆者が認識したプロセスについて、前後の段落の内容と結び付けながら理解させる。 ② 生徒自身の「歴史」に触れた経験を思い浮かべさせながら、なぜ「わたし」が「生まれて初めて『歴史』というものに触れた」と感じたのかを理解させる。 (1)ビートルズの名曲を聴き、「こんな偉大な人たちと同じ時代に生きていてよかった！」と感じている。 (2)「学校で受けた歴史教育」における「歴史」と、ビートルズの新曲を通じて実感した「歴史」とのずれに注目させ、その相違点について考えさせる。	① 「学校の歴史教育」の特徴について、本文中の複数の例示をもとに理解させる。 (1)「過去」＝偉大なもの(父親・母親・祖父・祖母・赤ちゃん)、「現在」＝つまらないもの(自分) (2)「歴史」＝時間の不可逆性(「過去」は戻ってこない、触れられない) 現在自分が受けている「歴史教育」について生徒に考えさせ、どのような特徴があるのかを筆者の見解と比較しながら話し合わせる。 ① 第一段、第二段の内容を受けて、ここで筆者が「文学史」をどのように見て、自分の「文学史」を書くことができるという考えにいたったかを理解させる。 (1)一般的な「文学史」における「過去」の小説とその評価について、教科書や資料集を用いて生徒にイメージさせる。 (2)『過去』なんてないんじゃないかな」、「あまり変わってないんじゃないかな」という筆者の言葉から、従来的な「歴史」認識との相違を整理させる。	

時限	展開	まとめと発展
指導上の重点目標		1 これまでの学習内容を踏まえて、古典から現代までの作品に関する「自分の『文学史』」を作らせる。
学習活動	① 〈第四段〉（三〇五・10～終わり） 「歴史」とは何かという問題について考える。思判表	① 評論全体を読み直し、筆者の「歴史」観、「文学史」観をまとめる。思判表 ② これまでの学習を総合し、古典から現代までの作品を見渡して自分なりの文学史を作る。主態・知技
指導上の留意点	① 『歴史』というものは、鑑賞するために壁に掛けられた絵ではありません。」という一文を踏まえながら、生徒自身の「歴史」のとらえ方を見つめ直させる。その際、次の考え方を順に確認させる。 （1）「歴史」とは「過去」の〈事実〉の集積ではないということ。 （2）「歴史」とは、それを作る「現在」を基点に作り出される枠組みという一面を有していること。 （3）「現在」には個々の生徒自身も含まれ、「歴史」の形成に参加しているということ。	① 筆者の考え方を踏まえることで、古典や漢文、近現代の文学作品を読んだ際に、どのような変化が生じるかを考えさせる。 ② それぞれの作品を自分で読み、評価を考え直す過程には論理的な思考力や創造的な読解力、各時代を見渡した批評性が求められる。したがって、「自分の『文学史』を作る」作業こそ主体的かつ総合的な学習となり得ることを理解させたい。